

# 木 精

こだま

靴を地面にめりこませ腰を落とし、振りかざした斧をブンと振りおろす。ドズンと鈍い音がするが、刃がめりこむだけで株はこらえている。ギシギシと刃をならして斧を抜く。

「お若いの」と、木株が苦笑いしているようだ。しかし、ここで木株の挑発にのってはいけけない。急くと斧はとんでもないところに食いこむ。木株に引導を渡すには……などと剣豪のようなこころもちで、ふたたび腰を落として斧を振りかざす。

ブン。

タン。

斧が台木に当たって乾いた音をたて、切り株は半身を残し、もう片方は地面にごろりと横たわった。木肌が晩秋の青空を映すほどに輝いている。

文六は、台木に残った株をさらに半分に割ろうと斧を構えた。そのときだった、外から内に収斂する年輪の中心に、それがいた。

木にくるまれて木が育っていたのだ。実際はそんなことはありえないのだけれど、植物の生態にあかるくない文六にとっては新鮮で、奇跡的にみえる光景だった。

おもわず「木の精」と文六はつぶやいた。木の精の肌は、ほかの部分よりも少し濃い色をしており、指でなぞると柔らかく、コットンのような感触だった。

木口に指をかけ、力を入れると「ペキン」と剥がれた。すでに斧

傷を負っていたが、文六は木の精を脇に置くとまた、仕事にかかった。

薪割りの仕事 といっても、今夜暖炉にくべるぶんを補充する程度なのだが をおえると、文六は木の精をもって自室のベッドにごろりと寝そべった。

木口をみると三年ほどの若木であることが知れた。この木の精が隠れていたのが樹齢三〇年ほどのミズナラだった。鼻を近づけ、ミズナラのおいはいはこういうものなのかとも思う。それは昔、下町の貯木場で嗅いだにおいに似ていた。決していいにおいではない。もしかしたら木の死臭なのかもしれない。言ってみれば嗅がずにはいられない自分の靴下のおいとでもいったらよいだろうか。文六は「三〇年も風呂にはいっていなかったんだからしょうがないよな」と木の精に話しかけた。

この夏に別荘地の造成で伐られ、その後の乾燥の具合で、まわりの層とのあいだに隙間ができていたところに、うまい具合に斧がはいっただけなのだろうが、文六は、かくれんぼうをしていて最後までみつけれなかった子どもをみつけたようで、ちょっぴり得意だった。

「三〇年前かぁ……。小学二年生、なにやってたんだかなぁ。担任は早川先生という女の先生だったな。体育の時間に、教壇の陰で着替えていた先生のオッパイがどういわけかぼろりと見えたことだけ覚えている。みたのは自分だけかとおもったけど、最近、同じクラスだった親友に聞いたら奴も見たんだそうだ。世のなかのことなど何一つ覚えていなな。安田講堂の攻防戦を学校から帰ってランドセルを背負ったまま見ていたのはあそこかな。テレビは白黒だった。見ないときはカバーをかけていた……」

木に隠れる木。三〇年間、木のなかに棲んでいた木。久々にみつけた宝物である。

